

「底が突き抜けた」時代の歩き方 560

アンナ・ポリトコフスカヤの暗殺に対する人々～メディアの反応

HPからいくつかの情報を下記に抜粋してみる。

●プーチン政権の暗部を取材し続け凶弾に倒れたロシア人ジャーナリスト、アンナ・ポリトコフスカヤさんの追悼集会が昨夜（12日）、東京都文京区で催された（共催：チェチェン連絡会議、市民平和基金など）。

会場の文京区民センターには、アンナさんの死を悼む勤め帰りの市民など約200人が集まった。主催者を代表して「市民平和基金」の青山正さんが「チェチェン問題を追及し続けてきた私たちにとって悲しい出来事です。私たち日本の市民にとっても事件です…」などと追悼の辞を述べた。

反クレムリンの姿勢を貫く「ノーヴァヤ・ガゼータ紙」で、アンナさんはプーチン政権の腐敗を追及する取材を始める。腐敗の核心であり、彼女が全身全霊をあげたものがチェチェン戦争だった。追悼集会でのスピーチもチェチェン戦争が中心となった。

プーチン氏はチェチェン独立に対して強硬な政策をとることで大統領に上り詰め、現在の地位を築いたともいわれる。大統領に当選した2000年の選挙で、プーチン首相（当時）は戦闘機に乗ってチェチェンに乗り込んだ。ソ連の崩壊でプライドを傷つけられていた国民に対して、強いロシアの復活をアピールするためだった。プーチン氏を当選に導いたのは、このパフォーマンスだったといわれる。

対チェチェン強硬策は「テロとの戦い」とプーチン政権は強調する。ところがそのテロは「自作自演」の「官製テロ」ではないかとの見方が尽きない。

2000年の大統領選挙直前に、モスクワ郊外のアパートで連続爆破事件があり、243人が死亡した。プーチン陣営はチェチェン独立勢力によるテロだと決めつけ、世論を煽った。ところがアパートにはFSB（連邦保安局＝KGBの後身）のベースがあり、爆薬を所持していたFSBのエージェントが見かけられているのだ。

2期目を目指す2004年の大統領選挙直前にも、モスクワ地下鉄爆破事件があり、39人が死亡している。ロシア政府はこれもチェチェン独立勢力の仕業である、と喧伝した。だが有力な根拠はなく、こちらにも「官製テロ」との指摘がある。

プーチン大統領が権力を維持するためには、チェチェン独立勢力はテロ組織であらねばならない。プーチン政権はチェチェンにおけるクレムリンへの敵対意識を煽ってきた。このためにも徹底弾圧し続けるのだ。チェチェン人とあらば武装勢力でなくとも拷問あるいは殺害したりするケースもある。プーチン政権によるこうした蛮行は、人権団体の間では常識だ。

アンナ・ポリトコフスカヤさんが「ノーヴァヤ・ガゼータ紙」に入社した1999年は「第2次チェチェン戦争」が始まった年だ。「第1次チェチェン戦争」と違い「第2次」は、ジャーナリストの現地取材に大幅な規制が加えられていた。アンナさんは危険を犯しながら、数十回にわたってチェチェンに入り、拷問などの実態を取材した。そして告発し続けた。

アンナさんは、プーチン政権が最も隠しておきたい事実の数々を明るみに出した。権力にとっては当然、厄介な存在となる。彼女は「チェチェンのカディロフ首相（クレムリンの傀儡）とその一派に『殺す』と脅迫されている」とプラハの人権団体に明かしていた、という。

アンナさんは6日、モスクワ市の中心部にある自宅アパートのエレベーター内で何者かに射殺された。捜査当局によれば、発射された弾丸は全部で4発。3発は胸部に、1発が頭部に撃ちこまれていた。拳銃は遺体の傍らに添えられていた。権力の不正を追及するジャーナリストにとってこれほどの圧力と脅しはない。

「ラジオ・フリー・ヨーロッパ」によれば、ソ連崩壊（1991年）後、ジャーナリストの殺害はこれで42人目、プーチン政権になってからは12人目となる。真犯人は1人もあがっていない。

●全世界の報道に対する野蛮な挑戦を許してはならない（萩谷 良 2006年10月10日（火）午後6時39分）

チェチェンでは、国際機構による選挙監視のもとで民主的に選出されたチェチェン大統領マスハドフまでも、2005年3月に暗殺され、混乱に拍車がかかりました。そんな状況を報道するはずのジャーナリストも、ロシアでは、殺害の例が枚挙に暇がありません。そんな中、アンナ・ポリトコフスカヤさんは文字通り決死の覚悟でチェチェン報道を繰り返す、同問題ではおそらく世界で最も有名な優れたジャーナリストでした。そんなポリトコフスカヤさんが遂に倒れたと聞き、悲しみと怒りに耐えません……。実際、チェチェン報道で知られるジャーナリスト常岡浩介氏は、日記で「ポリトコフスカヤ暗殺—そして誰もいなくなった」と表現しました。

●ポリトコフスカヤの殺害は「世界の報道界を茫然とさせる蛮行」だ——国際ジャーナリスト連盟（邦訳：坂野正明／TUP 2006年10月7日）

国際ジャーナリスト連盟（以下、IFJ）は、チェチェンでのロシアの戦争に対する激しい批判で知られるロシア人報道記者アンナ・ポリトコフスカヤのモスクワでの殺害について、「世界中のジャーナリストを茫然とさせる衝撃的な蛮行だ」と表明した。

同女史の殺害はロシアのジャーナリズムを脅かす無法状態を反映したものだ、とIFJは言う。IFJは、ウラジーミル・プーチン大統領の政府に対し、即刻、殺人犯を逮捕し法の裁きを受けさせるよう、求めた。

ポリトコフスカヤは、土曜日[訳注：2006年10月7日]に射殺された。報道によれば、遺体は、女史の自宅[訳注：集合住宅]の建物のエレベーターで発見されたという。

IFJ事務総長のエイダン・ホワイトは、「ロシア当局は、緊急かつ集中的な捜査を行なわ

なくてはならない。誰が我々の仲間を殺したのか、そして事件のそもそもの黒幕は誰なのか、我々は知る必要がある」と述べた。

ポリトコフスカヤはノーヴァヤ・ガゼータ紙に勤務し、無法地帯のチェチェンで、山賊や、ロシア政府あるいはチェチェン政府の繰り出す暗殺隊の脅威に直面しながら挑戦的なジャーナリズムを生み出すという驚くべき勇気を見せ、チェチェンにおけるロシア軍の人権侵害という、論争の元となるような報道を続ける中で名声を確立した。

女史の名声と痛烈な報道は、ロシア政府にはまさに目の上のたんこぶだった。だから、2004年に女史がベスラン学校占拠事件[訳注:ロシア連邦・北オセチア共和国で起きた事件。500名以上の死者を出す惨事となった。いまだに全容は不明のまま]報道のため当地に向かう際、機中で食中毒を起こして重態に陥ったとき、多くの人々は、彼女が暗殺されかけたと信じたのだった。

「ソビエト連邦が瓦解しつつある時代、勇敢な記者の一群が新たに出現したが、その中でも女史は最高に勇敢な人だった。」ホワイトは続ける。「女史は、あらゆる方面からの脅威に毅然と立ち向かい、国内外を問わずジャーナリストを鼓舞する存在だった。彼女の殺害は、世界の報道界を茫然とさせる衝撃的な蛮行だ。」

国際ジャーナリスト連盟は、来年の世界総会をモスクワで開く予定であり、その際、アンナ・ポリトコフスカヤは招待講演者の一人だった。

「女史の勇気とプロ魂はジャーナリストや人権活動家の間で賛嘆の的で、女史は英雄だった。」ホワイトはさらに続ける。「女史の死は、年若い遺族と、彼女を知るすべての人々にとって悲劇だ。しかし一方でその死は、現代ロシアの絶望的で脆い民主主義の現状を浮き彫りにしている。」

ポリトコフスカヤは1958年にニューヨークで生まれた。両親は(旧)ソビエトのウクライナ人で、国連外交官として当地で働いていた。国立モスクワ大学ジャーナリズム学科卒業。

●☆ロシアの暗黒——アンナ・ポリトコフスカヤ抹殺★(2006年10月12日)

「プーチン政権によるチェチェン紛争での残虐行為を鋭く告発してきたロシアの女性ジャーナリスト、アンナ・ポリトコフスカヤさん(48)が7日、自宅アパートのエレベーターの中で射殺体で見つかった」と、10月9日付朝日新聞のモスクワ発記事が伝えました。遺体のそばに「拳銃と薬莢4個」が落ちていたそうです。この記事が紹介する「02年のモスクワでの劇場占拠では、チェチェン独立派の容疑者グループから交渉役に指名された。04年におきた学校占拠テロでは、現地に向かう機内で毒を盛られ、一時重態になった」というエピソードが、彼女の立ち位置を表しているでしょう。

イラクでも数多くのジャーナリストの非業の死が伝えられ、いかなる戦争も、報道の自由、そして知る権利とは相容れないとの思いを強くします。平和を祈る翻訳者のひとりとして、米ネーション誌発行人による追悼の文を紹介することにより、弔意を表したいと思います。井上利男

●勇気あるジャーナリストの死——カトリーナ・ヴァンデン＝フーヴェル ネーション

誌サイト・ブログ 2006年10月8日

ロシアと世界は、勇気ある偉大なジャーナリストを失った。10月7日のアンナ・ポリトコフスカヤ（Anna Politkovskaya）殺害は、おぞましく衝撃的なできごとだが、予期できないことではなかった。モスクワ極限状況ジャーナリズム・センター（Moscow's Center for Journalism in Extreme Situations）を率いるオレグ・パンフィロフ（Oleg Panfilov）も、ポリトコフスカヤ暗殺の報せを受けて、「いつ同じ目にあうとも限らないジャーナリストは他に何人もいます。なによりもチェチェンのせいで、アンナの身になにか起こるのではないか、と私はいつも思っていました」と語っている。

これは「野蛮な犯罪」だ、とロシア〔旧ソ連〕の元大統領——そしてグラスノスチ〔情報公開〕の父——ミハイル・ゴルバチョフは言う。「これは民主的な無党派報道の全体を狙った攻撃です。国家に対する、私たち全員に対する憂慮すべき犯罪です」

ポリトコフスカヤは、自宅アパートの建屋内において拳銃で頭を撃ち抜かれているのを発見されたとき、まだ48歳だった。これまでの10年の間に、チェチェン戦争の残忍さと不正行為を暴く恐れを知らない報道により、彼女はロシアで指折りの勇敢なジャーナリストとして知られるようになった。

過去数年間に数えきれないほど受けた死の脅迫にも、彼女はひるむことがなかった。実を言えば、殺されたときも、ポリトコフスカヤが親クレムリン派首相のチェチェン共和国政府内の拷問者たちについて書いていた記事が脱稿直前で…月曜日に発表される段取りになっていた。

ポリトコフスカヤは、チェチェンの民間人に対するロシア軍と治安部隊による大量処刑、拷問、レイプ、誘拐を記録に残す、恐れを知らない記者だった。彼女は戦争という癌を理解していて…「テロに対するブッシュ=ブレア戦争」が、プーチンに自分は国際テロに対して戦っているのだと言うことを許している実態について書き、発言した。実は、彼女が数多くの記事に書いたように、クレムリンの政策と残酷なチェチェン占領は、撲滅するはずのテロリストを、かえって増やしていたのである。

チェチェンにおける人間性の破滅を報じる彼女の、赤裸々で、焼けつく痛みすら覚えさせる記事は主にノーヴァヤ・ガゼータ（Novaya Gazeta）に掲載された。同紙は、ここ5年の間にロシアの代表的な反政府派の新聞になった。改革を訴える彼女の調査記事がロシア国内で公表されたのは、ノーヴァヤの功績である。彼女の死につづき、次はその新聞が犠牲になるのではないかと懸念されている。だから、国際報道界がこの隔週刊新聞の、政府から独立した、反政府派の声を擁護することが重要だ。（あまり注目されていないが、今年の6月、ゴルバチョフはノーヴァヤの少数株主・共同経営者になった。彼の存在が、同紙の声を抑えこもうとするクレムリンの意図に対する一定の歯止めになるかもしれない）

私は、モスクワとニューヨークで、何回かポリトコフスカヤに会っている。ニューヨークでは、彼女がこの数年間に受けた数多くの賞のひとつが授与されたジャーナリスト保

護委員会 (Committee to Protect Journalist) 主催の晩餐会の折にも会った。彼女は戦争の悲惨さを激しい調子で語った。そして、不正と腐敗とがロシアを窒息させていると断言した。彼女独特の語り方にはぶっきらぼうなところがあった——彼女の調査報道でもそれは同じである。2児の母、ポリトコフスカヤは彼女自身が抱える恐怖を打ち明け、ロシア最強の勢力と渡り合うなかで直面しているとみずから承知しているリスクについて語った。しかし、それが、自分のジャーナリストとしての義務だと情熱的に信じているものに干渉することを断じて許さなかった。2年前のBBCのインタビューで、ポリトコフスカヤは語っている。「危険が、私の仕事、つまりロシアのジャーナリストという仕事にいつも付いてまわることは絶対に確かです。それでも私の任務ですから、やめるわけにはいきません。医者務めは患者に健康を授けることであり、歌手の務めは歌うことであると思います。ジャーナリストの務めは、自分の目で見た現実を書くことです。これが私のかけがえのない義務なのです」

愛する祖国の腐敗した政治に対する妥協のない彼女の告発の書——最新著作“*Putin's Russia*”《1》は、アメリカで出版されたばかりである。ぜひ読んでほしい。だが、彼女の友人、パンフィロフが土曜日に語った「ロシアに誠実に真実を伝えるジャーナリズムが存在するのだろうか、と疑問に思うたびに、私の念頭に最初に浮かぶ名前がポリトコフスカヤでした」という言葉の意味をなによりもよく説明するのは、ロシアが長くつづけてきた残忍な戦争に関する彼女の報道である。それは上記の本より前に出た“*A Small Corner of Hell: Dispatches from Chechnya*”《2》にまとめられている。この勇敢で誠実なジャーナリストは、ロシアにおける人権のための長い闘いのなかで、言論の自由と報道の自由という基本的な理想に関して決して妥協しなかった。願わくは、このことが人びとの記憶にとどめられんことを。

1992年以来、ロシアで42人のジャーナリストが殺されている…それも、多くが殺し屋を使った殺害で、迷宮入りである。ジャーナリスト——ならびに自由な報道の重要性を知る全世界の市民——は、ロシア政府に対し、ポリトコフスカヤ殺害の、そして彼女の仲間たちの殺害の責を負う者たちを割り出し、訴追して、裁くため、徹底した捜査をただちに実行することを要求する声をあげるべきである。

● バイナフ自由通信 2006-10-13

ポリトコフスカヤはチェチェン報道のせいで暗殺された アンドレイ・バビーツキ
2006年10月7日 ラジオ・リバティ (ロシア語版)

わたしはアンナ・ポリトコフスカヤをよく知っていましたし、チェチェンでは共に仕事もしていました。彼女はこの数ヶ月間ラムザン・カディロフによる牢獄の拷問に関する取材に携わっていましたので、まず頭に浮かんだのは、チェチェンの足跡、つまりチェチェン指導者層を暴露したことに対する報復ということであり、そしておそらくこの方向で捜査も進められていくことでしょう。

これは十分に根拠のある説だと思います。しかもこのことは今日既に何度となく述べ

られています。ラムザン・カディオロフとその一味がチェチェンで行っていることを、アンナ・ポリトコフスカヤ記者は長期にわたって基本テーマにしていたのだと私には思われます。つまり彼女は、カディオロフの事実上独裁、そしてチェチェンでの専横や暴力について書いていた最後の記者の一人だったのです。カディオロフによるチェチェンがいかなるものなのかを示す具体的な事例についてこれほどまでに綿密な調査を行う記者は、今日誰一人としていません。

ラムザン・カディオロフや、彼がチェチェンで行ったこと、その取り巻きによる残虐行為の多くについて、アンナ・ポリトコフスカヤは直接的に書いてきました。彼女が描く光景は、カディオロフやその PR グループが作り出そうとしているチェチェンのイメージとは全くかけ離れたものでした。現在カディオロフのもとには十分な数の専門記者や政治学者が集まり、復興しつつあるチェチェンの姿を演出しようとしています。一方でポリトコフスカヤは各国で数々の会議や立派なフォーラムに出演し、「カディオロフのチェチェン」で起きていることについて語ってきました。

ポリトコフスカヤがチェチェン報道のせいで暗殺されたとする説はとても有力であるように考えられます。けれどもたとえこの説に従って捜査が行われたとしても、犯人を発見できる見込みがいかにほどなのか、正直なところ私には言い難いです。今日のロシアにおける政治的状況では、その可能性がきわめて低いもののように思われるのです。

● バイナフ自由通信 2006-10-15

ラジオ・リバティからの記事、いくつか 10月11日以降のラジオ・リバティより、ポリトコフスカヤ暗殺に関する続報です。(邦枝律)

カディーロフ、ポリトコフスカヤ暗殺容疑を否認 2006年10月11日ラジオ・リバティ
アンナ・ポリトコフスカヤは、暗殺された当時、チェチェン親ロシア政権のボス、ラムザン・カディーロフの不正や市民の誘拐や殺害を含む人権侵害について調査をしていました。というわけで、カディーロフは事件の主要な容疑者の一人であるわけですが、当のカディーロフのコメントは「俺は女は殺さない」というもの。どこから突っ込めばよいのやら。ちなみに、プーチン大統領は、ポリトコフスカヤの記事によってカディーロフの「政治的業績」が損なわれることはない、と発言したそうです。彼の「政治的業績」というのは、不正とか、市民の誘拐とか、殺害とかのことでしょうか。

● 「最後の希望」としてのポリトコフスカヤの葬儀 2006年10月11日ラジオ・リバティ

ポリトコフスカヤの葬儀の様子や、彼女の死に対する関係者の反応が紹介されています。

事件のもう一人の容疑者であるプーチン大統領は、葬儀の当日、ドイツのメルケル首相との首脳会談の中で、事件を「おぞましく残酷な犯罪」と非難しながらも、事件の影響を「極めて取るに足らない」ものとして、「彼女は欧米のジャーナリズムや人権活動家の中では著名だったが、ロシアにおける政治的な影響はごくわずかにすぎない」などと断言しています。要するに、ロシアの政治にはジャーナリズムも人権活動もおよびでないと断言しているわけですね。すさまじい「言論の自由」です。

一方、チェチェンの人々の反応はというと、「ジャーナリズムや現在の情勢に対してまったく興味を持っていないように見える人々でさえ、すっかりパニックになっている」そうです。

「彼女はチェチェンで起こっている恐ろしい出来事に関する真実を伝えてくれる唯一の人でした…私たちにとってもっとも素晴らしい代弁者が殺されてしまったのです。私がどれだけ狼狽しているか、言葉ではとても表現できません。私は彼女の『ノーヴァヤ・ガゼータ』の記事をすべて持っています。絶望に陥ったときには彼女に連絡できるように、彼女の住所や電話番号も控えてありました。彼女は私の最後の希望だったのです」(セルゼン・ユルト村の女性 アミナ)

「彼女が殺されたという知らせを受けたとき、生まれて初めて涙が止まらなくなりました。男が泣くなんてみっともないですよ。でも、今日は自分が泣いたことを恥ずかしいとは思わない。彼女は私たちに献身して亡くなったのだと思います」(パリ在住のチェチェン人男性 アプティ)

「私は彼女が殺されるかもしれないという不安をつねに抱えてきました…心が張り裂けそうです…彼女は、唯一の人でした。この広い国の中で、彼女ほど、私たちのことを考えてくれる人など、もうどこにもいません」(オランダ在住のチェチェン人女性 ダグマル)

「彼女の代わりが再び現れるなんて、私には思えません。ジャーナリストたちは怯えきっています。自分の命を賭けてまで彼女のようなことをする人が現れることはないでしょう。まるで二人の息子が殺されたときと同じように、彼女の死をどう受け止めればよいか、わかりません」(トルコ在住のチェチェン人女性 ライラ)

[コメントを書く]

momo (尾花桃子『音楽の教師です。授業で、アンナのこととチェチェンのことを紹介しました。私自身が彼女の本でチェチェンについて知った一人です。]

世界は世界にとって重要な人物を失いました。でも、ロシアがチェチェンを隠そうとしても、世界が自分にとって都合の悪い人間を例え殺し続けても、真実を訴える声は消えることなく、さらに大きく響いてゆくのだと残された者が世界にみせていかなければいけません。『私達はまだ世界をあきらめていない』という気持ちで繋がっているとみせなければ、大事なことからどんどん消されていくのでしょうか。『チェチェンやめられない戦争』の一説を生徒(高校生です)に紹介している時、彼等の顔は真剣でした。悲しみに満ちた顔の中に、真実を知りたいという意志を感じる事ができました。世界に向き合う事で、私達は問題を、悲しみを、希望を、共有しているのだと、そう感じる気持ちを失しなわないと、チェチェンの人々やなくなったアンナや全ての人に私は約束したいと思いました。』(2006/10/16 17:02)

■チェチェンでの平和創出のためのジャーナリストからの提案

— 貧しい人々は平和を求め、宮廷の連中は戦争を欲する —

(アンナ・ポリトコフスカヤ 2004.09.13)

テロを止めるには、チェチェン問題の武力による解決という考えを捨てなければなら

ない。だが、どうやってそれをやることができるだろうか？

9月1日からの3日間の出来事で、クレムリンの住人たちの道義的、知的レベルでは第二のベスラン事件をくいとめるのは期待できないことが明らかになった。あの悲劇のあとに起きていることは、それ以上のことを示している。政府は事件からなんの教訓も引き出そうとはせず、相変わらず嘘をつき、黒を白と言いくるめようと、立ち回っている。これが意味するのはただひとつ——わたしたちの子供や孫たちは、今も危険にさらされていると言うことだ。

地下室にこもっている権力者たち。彼らは国民が悲劇の中にあるときは地下に隠れる。少なくとも、隠れないでくれるひとたちが必要だ。

彼らは何をしてくれたのか？

この数日間の重要なこと：当局はベスランの悲劇に対して何をしたのだろうか？という新たな方策をとって、国民の安全を守ろうとしているのだろうか？なされた身振りはただ一つ、ロシア南部での「対テロ作戦」関連の人事刷新だけだ。各地域ごとに、「対テロ作戦担当」の上席将校が内務省軍から任命された。この上席将校たちは担当地域のナンバーワンに次ぐ地位にあたる。もともとの制度として、それぞれの地域のテロ事件について全責任を負わされている各大統領たち、ジャジコフ、アルハノフ、ザソーホフらが「対テロ作戦委員会」の議長だった。その次席人事が変更されたのだ。

しかも、「対テロ作戦」の上席将校たちにはそれぞれ特殊部隊員が70人ずつ与えられた。つまり、ベスラン事件後の南部ロシア地域の補強として。それっきり？それっきりだ。注意をそらすための典型的な役人風のやりかた。では、ロシア南部の「対テロ作戦委員会」の指導者とはどういう人たちだろうか？ベスラン事件を未然に防ぐためにあらゆることをする義務があったのはどういう人たちだったのか？の事件が起きてしまったとき、人質解放の指揮を執るべきだったのはどういうひとたちなのか？

●臆病者たち

どの時代にも汚点はある。ブレジネフ時代にはシニカルな頹廃があった。エリツイン時代は早い者勝ち、とれるだけとれ。プーチン時代、これは臆病者の時代だ。プーチンについているのは誰か？

まず、イングーシ大統領のジャジコフ氏、この人は政権について2年半だが、それまではKGBとFSBで勤務、プーチンの職業上の媚さんのようなもの。イングーシの大統領の座にジャジコフをつけたのがプーチンとその一党であることは誰も疑う者がいない。ジャジコフ統治の2年半にイングーシでは憲法に違反する特殊部隊の横暴、連邦保安局や「死の部隊」による人々の拉致誘拐を許してきた。その反動として、青年たちは山に入り(武装勢力に参加し、訳注)、さらに大きな反動として、一連のテロ事件が起きている。ジャジコフは何をしているのか？イングーシのテロ取り締まり委員会の議長は？彼は保安局の職員らしく、いつもの席でじっと動かない。

私は何を言いたいのかって？別に何も悪くない。連邦保安局の職員というのは、人々

や世界を他人の背中越しに観察している人々のことだ。そういう職業なのだ。目に見えない脅威と戦う、見えない戦士だ。悲劇が起きるのは、脅威が現実となり、大統領が前面に出ていって、強盗どもに対する抵抗を指揮しなければならないような時、たとえば、6月21日から22日にかけてのイングーシの襲撃事件だ。

あの夜、何十人もの人々が殺されていたときに、ジャジコフは地下室で、事態が収束するのを待っていた。その大事な命を守ろうとして。大統領の心臓、これはたしかに重要で貴重なものなのは、誰も異論がないだろう、そういうものを隠しておくのはまさに地下室しかないのかもしれない。しかし、他のひとたちの命だってそれに劣らず貴重なはず…。

その結果、92人のイングーシ人の心臓が打ち抜かれた。襲撃した犯人たちに対して効果的な抵抗がまったくできなかったせいだ。何より問題なのは、武装集団はこの手の作戦が今後も可能だと、確信したということだ。

ジャジコフについてはまた触れることにして、今は8月21日のことを。グローズヌイ。この街が武装勢力に占拠されたのも、まったくイングーシのシナリオの再現だった。その夜、プーチンのお気に入りアル・アルハーノフやラムザン・カディロフはどこにいたのか？よくテレビで、強盗どもを取り押さえるのはもう間近だとおしゃべりするの好きなあの人たちは？

ふたりとも地下室に隠れていた。誰も指揮をとらなかった。彼らは「国際テロリズム」との今後の戦いのために、命を大事にしていたのだ。50名以上の命が失われ、またもや肝心なこと、武装勢力は、こういうことを今後も続けられると確信を強めた。

そして、いよいよベスラン。獣どもは子どもたちに爆薬を仕掛け、チェチェンの忌まわしい戦争の終結という要求を出した。ジャジコフ、アルハーノフ、ラムザン・カディロフなどは「敵はここに侵入できない」とプーチン大統領に請け合ったはずなのに。あの9月1日の朝に事件が起こったからには、すぐ学校に行くべきだった（この獣たちが名前をかたったマスハーダフ(独立派の大統領)も同じだ）、それぞれの身の安全などで身を惜しんだりせず、使えるあらゆる手段を駆使して子どもたちを解放するよう説得すべきだった。そういう場合には、どちらが正しいかなど、後回しにすべきなのだ。

ところが、実際は、ジャジコフも、アルハノフも、ラムザン・カディロフも、マスハーダフすらまったく姿を見せなかった。臆病風を吹かせたのだ。数百人の子どもの命より、自分の命が大事だった。わたしの考えでは、強盗たちは臆病者たちの親類、同じ人種だ。

頭のいい人たちはこう言う。ベスランで交渉するなど愚の骨頂だった、と。それは死刑判決とおなじことで、殲滅されてしまっただけだろう、と。そうかもしれない。だが、それがどうだというのだ？身から出たさびではないか。しかも、結果は罪のない子どもたちが、臆病で愚かな人々のかわりに責任を取らされたのだ、その人たちがどう言っていたか思い出してほしい「われわれはすべての責任をとる」と。

一つ思い起こすことがある：女性や子どもたちの命と引き替えに生き延びるという先例を、わが現代史で示したのは今年の5月9日に殺されたカディロフ（ラムザンの父親）

唯一人だ。これは 2002 年 10 月のことだった。ミュージカルの「ノルド・オスト」が上演されている劇場を占拠したテロリストたちが、アフマド・ハジ・カディロフが出てくれば 50 人の女を人質から解放すると宣言した時、カディロフは、自分の命を 50 人の女性より大切に、出て行かなかった。それから、まもなく、プーチンはアフマド・ハジ（カディロフ）こそ、チェチェンにおける自分の寵臣であることを世界に見せつけた。

ジャジコフ、カディロフ・ジュニア、アルハーノフ、この三人は三人ともプーチンのお気に入りであり、だからこそ、まったく同じように振る舞ったのだ。勇敢だった者は取り除かれた（アウシェフ元イングーシ大統領は 26 人を救い出したのに、その後誰も触れようとしない。この大統領が辞任させられた後にジャジコフがイングーシ大統領になった経緯は「チェチェンやめられない戦争」（NHK 出版）に詳しい）。そして、新たな「テロ取り締まり策」の内容と言え、これらの臆病者たちにそれぞれ上席将校一人、と 70 人ずつの特殊部隊を与えるということなのだ。この助っ人がテロを防いでくれるということか…

でも、臆病者にはテロを防ぐことはできない。内務省軍の上級将校だって、また次の Xデーにこの 3 人の命を守るのがせいぜいだ。それ以外の私たちにとっては、何の助けにもならない。

結論は簡潔明瞭：担当地域の「テロ取り締まり作戦」の長とされているジャジコフ（イングーシ大統領）もアルハーノフ（チェチェン大統領）もラムザン・カディロフ（暗殺された傀儡のアフマド・カディロフの息子で首相、訳注）も、これ以上その職務にとどまることは許されない。これは死を意味するからだ。— 彼らのではなく、私たち皆の死だ。しかも、これがまだひとつめの結論でしかない。

第二は何か？テロ活動に対抗できることとは何だろうか？何によって、次々におきるテロ事件の波を打ち砕き、すこしずつそれを鎮めていくことができるだろうか？

まず、必要なのは、社会的に明快な対抗策にのっとりた政府の勇気だ。その先は何か？テロ事件が起きる可能性を最小限にするために北コーカサスで何を変える必要があるだろうか？

●何をなすべきか？

以下に私のプランを示したい。

これはわが国で起きている多くのこと — プーチンの大統領任期第一期に起きたこと、そして今起きていること — に対して極めて批判的な、ひとりのジャーナリストとしてのプランだ。チェチェン問題を順を追って解決していくにはどうすればよいかをテーマにして、考えてみた。

北コーカサスのシャヒジズム（バサーエフらのテロだけでなく、チェチェン戦争全体を指している、訳注）を、今後どうすべきか。

私は村から村へ、街から街へと歩き回り、飽かずひたすら質問を投げかけるという仕事をしてきた。1999 年の夏から絶え間なく、来る月も来る月も。その主要なテーマとは：チェチェンに平和があるようにするには何をなすべきか？そのプロセスにおいてあ

なたはどういう役割が果たせるのか？チェチェンの将来像は？ロシアとともに、それともロシア抜きか？ロシアとともにというならどのように和解するのか？マスハードフが交渉相手とみなされない今、そしてマスハードフを排除した者たちとの交渉は事実上不可能な今、どのように和解ができるのか？

●チェチェン問題解決の提案

1. 「チェチェン問題解決の連邦評議会（合議制の評議機関）」を設置する。
基本的に、このメンバーに治安機関、軍隊、官僚はいれない―彼らに対しての信頼はないのだから。第二次チェチェン戦争の全期間を通して、人権擁護の監視員としてチェチェンで活動してきた一般市民代表は入れる。グローズヌイの政府庁舎という高い壁に隠れて居たひとびとではなく、真の信頼に値するのはまさにその人たちだ。どんな風向きでも常に反戦の立場で活動し、平和解決を求め、チェチェンの市民たちが実質上認めなかった2回のエセ選挙などではなく現実の政治プロセスを求めてきた、わが国の社会活動家たちによって構成される。
2. この評議会設置後は、チェチェン関連の政治上、財政上のあらゆる決定がここで採択される。
3. 評議会は具体的で明快な行動の計画、「第一に、第二に、第三に…」を作成し、それを公表する。その意味は、チェチェンの市民ひとりひとりがこの計画の一つ一つを明快に理解するものでなければならないからだ。チェチェンで紛争解決のために、何がいつ、どういう期限で実行されるのか。
4. チェチェン市民の大部分が彼を尊敬しなくなっているとはいえ、マスハードフとの政治的話し合いを必ず行う。何のためにか？その目的は、国民に対して詫びて、退任するかあるいは起きてしまった事態に対する法律上の責任を果たす機会を、マスハードフに与えるためだ。これはマスハードフにとってではなく、かつて彼を選んだ人々にとって重要なのだ。これは多くの人々にとって真の政治解決の出発点と受け止められるだろう。
5. ロシア連邦中央は、戦争中におきた一般市民の犠牲にたいする懺悔をする必要がある。
6. 政治解決の第一条件として、この地域の非武装化が不可欠だ。それは軍隊の撤兵なしにはできない。軍隊が残ることができるのは常駐の駐屯地のみで、しかもはっきり限定した移行期間のみだ。その期間は公表されなければならない。軍隊撤兵実現の条件も公表すべし（非武装化の違反にたいする罰則も）。
7. 当事者同士の全面的な不信感（連邦側の軍、特殊部隊、市民、カディロフ側勢力）というなかでの非武装化実施の方法は、市民が信頼できるような国際監視員（国連、OSCE, PACE 欧州評議会議員総会など）が必ず立ち合うことだ。国際監視員のみが、唯一誰の側にも与しない、公平な非武装化の保障となりうる。強制的な非武装化もあり得るかもしれない、これがロシア連邦軍の立ち会いでなされるのではなく、国際監視員が見守る中で行われるなら、市民はこれを認めるだろう。
8. 国際監視員の存在は全移行期間―双方の熱を冷ます期間―には不可欠である。連邦中央が国際社会にそのような監視を依頼することは決して弱さの証ではなく、かえって

連邦中央度量を見せることになる。

9. 移行期間の政治的指導部は「ロシア総督」（大多数が使っている言葉遣いでは）で、チェチェン紛争解決担当のロシア連邦大統領全権レベルの者。特別な権限を与えられた副首相でもあり得る。こうした体制ではアル・アルハーノフが今の地位に一定期間とどまるだろう。しかし、ラムザン・カディロフはどのような役職でも残すことは無理である。この人物は否定的な評価しかされていない。

10. 「総督」の主要な性格は軍人ではないということ。

その人物がチェチェン社会で名を知られており、尊敬されていること、このためには、所属の党派の方針にゆらぐことのない、チェチェン全体で政治的には常に反戦の立場を貫いてきた者。

11. グロースヌイに置かれる「総督」のチェチェン側事務局が不可欠だ。そのメンバー民間の代表で（ロシアでもチェチェンでもよい）チェチェンの状況、チェチェンの人々が戦争中にどんなことに困っていたのかを熟知しており、人権擁護の監視員として、当地で活動しており、人々の尊敬に値する人たち。お役人ではだめである。

12. 共和国統治のための経済機構—これは「総督」事務局に従うものとする。資金の流れは、汚点のない連邦評議会と市民社会の監視の下に置かれる。

13. 全国民的にチェチェンのありかたを漸次討議する。議会制にするのか、大統領制の共和国か。これはモスクワが決定するのではない—モスクワから下ろされる決定は受け入れられないし、それをすればチェチェンの国民的な合意は破れてしまう。

14. 全国民的に問題を検討する：どの憲法に則って行くのか。公開の形で、討論によって、憲法の「二重権力状態」—国民の一部は1992年の憲法を受け入れず、他の部分は2003年の憲法を受け入れていない—を収束させなければならない。そのような討論に、状況の正常化のために、また単一の憲法に従った誰もが参加できると見なすであろうような真に全国民的な選挙のための基盤がある。

15. そして、お互いの沈静化と非武装化に数年をかけた後に、これを国民の大多数が受け入れたのを見届けてから、（大統領共和国なのか、議会制共和国か）の自由な選挙を実施する。

他のひとたちには他のプランもあるだろう。わたしがここであげたのとことなる論拠もあり得よう。ロシアには憲法会議があったのだから、チェチェン会議が生まれるならそれもよし。いろいろな案を検討するために。論争し、討議を重ねる会議を、しかし、その論争も討議も速やかに進めなければならない、もう余裕はない。速やかに強力な知力の結集のための会議をつくらねば。野心のない、だれが先に招請されたなどということにこだわらない、我が国おなじみの政治エリートの下劣さ抜きで。

今はとにかく考えなければならない。生き延びるために。われわれ皆のために。ベスランの子どもたちの霊のために。臆病者たちにはその職から去ってもらうしかない。彼らの仕事は終わったのだから。

2006年10月31日記